



東洋英和女学院

史料室だより No.94

2020.5.10 発行
東洋英和女学院
史料室委員会



1964年10月15日
オリンピック東京大会
国立競技場で陸上競技観戦
(写真提供：梶田マリ氏)

★ 史料室所蔵の1964年 東京オリンピック関連資料

1964年の東京オリンピック開催時には、授業の一環として本校の小学部生、中高部生がオリンピック競技を見学しました。史料室には当日の入場券やプリント類が寄贈されています。今号では1964年 東京オリンピックから東洋英和の歴史をたどります。

★ 目 次

特集 1	1964年 東京オリンピックの時代と東洋英和女学院	2
〈資料紹介〉 36	学院創立80周年 関連資料	6
特集 2	オリンピックを支えた東洋英和の人びと	8
〈東洋英和の先生がた〉 4	芝原 翠 先生	
	短期大学図書館と史料室のパイオニア	10
おしらせ	展示コーナー／2020年度 村岡花子記念講座 ご案内	12
史料室から、ごきげんよう	ヴォーリス校舎 地下の巨大ベルトコンベアー?!の謎に迫る	13
利用統計／史料室の活動より (2019年10月～2020年3月)		14



特集 1 1964年 東京オリンピックの時代と東洋英和女学院



東洋英和女学院創立80周年記念式（1964年11月6日 東京厚生年金会館にて）

—おことわり—

今号の特集記事は2020年開催予定だった東京オリンピック・パラリンピック競技大会を想定して執筆されましたが、新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的な感染拡大により東京大会は延期となりました。特集執筆後に大会延期が決定したため、本文はそのまま掲載させていただきましたことをご了承ください。

（史料室）

はじめに

本年は7月から9月にかけて東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催される予定であり、前回の東京オリンピックから実に56年ぶりの東京での開催となる。

今回の特集では、ほぼ半世紀前となる1964（昭和39）年の東京オリンピックの時代を振り返り、同年に創立80周年を迎えていた東洋英和女学院が時代の歩みとともに大きく発展し、節目の時を迎えていたことを見ていきたい。

オリンピックをきっかけとした東京の変貌と東洋英和

昭和30年代、戦災から復興しつつあった東京では、オリンピック時の選手村と競技会場を結ぶ道路、さ

らには海外からの選手団や観客が利用する羽田空港と都心を結ぶ道路が建設されていくなど、オリンピックを契機に都市開発が進んだ。

当時、幼稚園から短期大学までを擁し、麻布・六本木に点在する校地を有していた東洋英和女学院周辺の環境も様変わりしていった。すでに1958年10月には学校の近景に「東京タワー」がお目見えし、その後、学院の校地を挟むように首都高速2号線（目黒線）、首都高速3号線（渋谷線）が建設されつつあった。1960年頃の六本木交差点の写真①、1965年頃の西麻布交差点の写真②を見ると、上空に覆いかぶさる高速道路も存在せず、町に都電が走っていた様子うかがえる。こののち谷町ジャンクションから六本木交差点を通り渋谷に至る首都高



① 六本木交差点（1960年頃）。現在とあまりにも景色が違うことに驚かされる。



② 西麻布交差点、前方は高樹町方面（1965年頃）。都電が走り、上空にはまだ高速道路が建設されていない。（写真提供 ①と②：山本香織氏）

速3号線が②の写真の上空に建設され、1967年に完成し、ここを走っていた都電は道路の完成時に廃止されていく。

さらにオリンピックイヤーの1964年には日比谷線が霞が関～恵比寿間で開通し、地下鉄六本木駅から学校への通学も可能になる。当時、学校に都電で通う英和生は多かったが、バスや地下鉄を利用するようになるなど、通学交通手段にも変化が生まれていった。東京の変貌は、東洋英和の環境、学校生活にも少なからず影響を与えていった。

東京オリンピック開催、東洋英和の教育現場では？

東洋英和ではオリンピックイヤーと同年の11月に創立80周年を迎えることになり、数々の大がかりな記念行事を企画・準備していたため、学院全体で多忙な1年を過ごしていたと思われる。

そうして、10月10日には東京オリンピックがスタートし、東洋英和でもさまざまなかたちでオリンピックを学習素材として取り入れていたことが史料室所蔵の資料からうかがえる。

「学内ニュース」第2号（1964年9月30日）によると9月26日には教職員はほぼ全員参加で、貸切バスに乗って「東京・水・道路・オリンピック」を学習テーマに、変わりゆく東京の姿を見学したという記録がある。「東京の教師が東京を知らねばどう

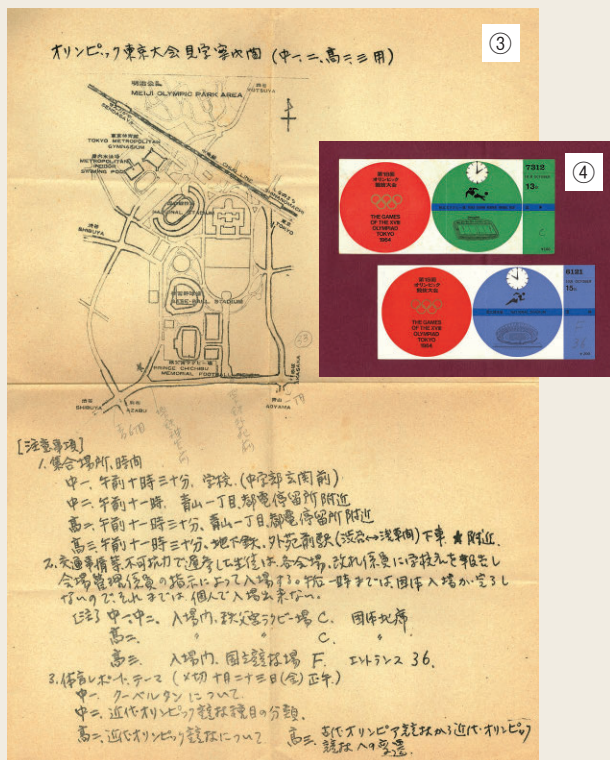
して子どもに生きた指導ができるか」とツアーの趣旨が述べられており、「水都」でもあった東京の変化について、先生がたは休日を返上して学んだ様子である。

そして、同号の巻末の各部行事の一覧には、小学部はオリンピックのリハーサル・聖火リレー・サッカー見学、中高部では修学旅行の中3を除く、各学年で陸上・サッカー見学予定だったことが記載されている。史料室には生徒に配布された「オリンピック東京大会見学案内図」プリント(③)と入場券(④)が寄贈されている。プリントには競技場の地図とともに、各学年の集合場所や時間が指示されており、遅刻者対応など、前代未聞のスポーツ行事引率について、さまざまな配慮がなされていたことがわかる。さらに生徒たちには、ただ競技を見学するだけでなく、オリンピック創設メンバーである「クーベルタンについて」など、レポートの課題が出されていたことも見て取れる。オリンピックで沸きかえる東京の熱気を英和生たちも存分に味わうことができた。

オリンピックと同じ年に迎えた創立80周年

日本経済が「成熟」段階に入ったのは、通常、経済協力開発機構（OECD）への日本の正式加盟と、国際通貨基金（IMF）の8条国移行によって「先進国」に格上げされた1964年からとされている。第二次世界大戦の戦禍を脱し、日本社会はさらなる豊かさに向かって進もうとしていたのが、東京オリンピックの時代だった。

東洋英和もまた、戦後復興の困難を克服し、80周年の時を迎えようとしていた。しかし、そこに至るまでの道は決して平坦なものではなかった。1933年に東洋英和に着任して以来、戦前から戦後にわたり実質的に学院の責任を担ってきたのは長野彌院長だった。戦後、東洋英和は後援会による募金



③ 「オリンピック東京大会見学案内図」
④ 授業でオリンピック見学に行った際のチケット
(資料提供：梶田マリ氏 酒井ふみよ氏)

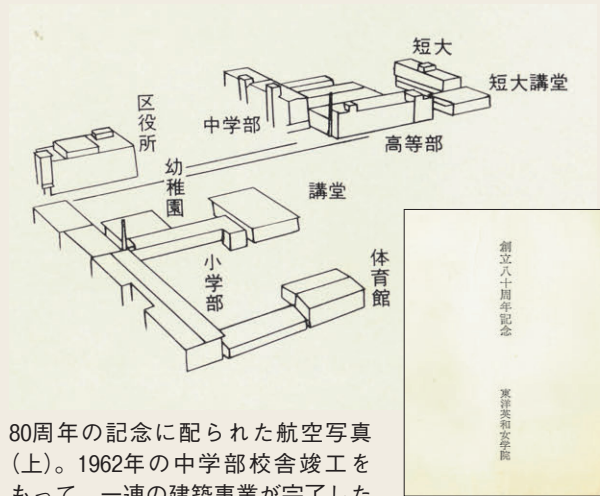


長野 彌 (ながの・わたる) 院長。戦前から戦後にわたり東洋英和を支え、80周年の時を迎えた。

活動、各種寄付、保護者たちからの学債、カナダ合同教会の婦人ミッションの資金援助等により、校地拡張、校舎建設を着々と進めていった。元々所有していた東鳥居坂町八番地と二番地の土地に加え、少しずつ鳥居坂周辺の土地を買い足し、戦後の新学制によるクラスの増加に対応し、学校教育法の学校設置基準を満たす校舎・設備の充実を図った。そうして東洋英和は創立80周年の時期に、戦後から続く一連の学校整備の完成を見たのだった(年表⑤参照)。それゆえに創立80周年は学院にとって大事な節目の時であった。

⑤ 戦後の東洋英和女学院の校地・校舎の拡張
 (『東洋英和女学院120年史』により作成)

1949年 2月	東鳥居坂町8番地の旧鳥居坂教会跡地購入(現中高部の校地拡張)
1950年 1月	東鳥居坂町8番地の山尾邸土地購入(現中高部の校地拡張)
4月	東洋英和女学院短期大学保育科開設
1951年10月	東鳥居坂町9番地の実吉邸土地購入(短期大学校地拡張)
1952年 4月	六本木町1番地の東久邇邸土地購入(幼稚園・小学部校地)
1954年 3月	短期大学木造新校舎定礎式
4月	短期大学英文科設置
5月	小学部新校舎献堂式
1955年 6月	東鳥居坂町8番地の土地取得
1956年 3月	野尻湖畔(桐久保)にキャンプ用地購入開始(~1967)
1957年 5月	東鳥居坂町9番地の千代田生命所有地購入(短期大学校地拡張)
10月	軽井沢町追分に土地購入
1959年 5月	短期大学新校舎・講堂竣工式
7月	軽井沢追分寮竣工式
1960年 5月	小学部講堂献堂式(地階に食堂設置)
1962年 2月	東洋英和幼稚園新園舎竣工式
10月	中学部新校舎落成
1964年11月	創立80周年記念行事



80周年の記念に配られた航空写真(上)。1962年の中学部校舎竣工をもって、一連の建築事業が完了したことがよくわかる。

10月のオリンピックに続く、11月の80周年記念行事は6日に「記念式」(於：東京厚生年金会館)が行われ、全教職員、全在校生、関係者が一堂に会した(2頁の写真参照)。続く7日には「記念音楽会」(於：東京厚生年金会館)が開かれ、創立80周年を記念して作られた「東洋英和の歌」(作詞：鶴沼幸、作曲：富岡正男)を全員で合唱した。

さらに11~12日に「記念祭」として公開行事が行われ、学生や生徒による各種舞台や弁論大会、講演会、各部の展示が行われた。14日には記念祝賀会も開かれた。当時、在学していた同窓生は「オリンピックに80周年が重なり、楽しいことがいっぱい



東洋英和女学院創立80周年記念祭
(1964年11月11～12日一般公開)

いの1年だった」と回顧している。

そして、戦前戦後にわたり学院を支えたカナダ人婦人宣教師の先生がたである元校長のミス・ハミルトンとともにミス・アレン姉妹も招かれ、「記念式」参列はもちろんのこと、「来日歓迎理事会」や「全教職員による歓迎のつどい」、周年記念「東光会総会」、母の会による「感謝の会」など、先生がたを歓迎する会合もさかに行われた。

ミス・ハミルトンは1938年に校長職を退き最後の宣教師校長となり、太平洋戦争勃発後も日本に留まるが、やむを得ず1942年に交換船で帰国した。戦後の1947年には戦禍の激しかった山梨英和に赴任し、1950年から再び東洋英和に着任し、短期大学保育科の科長を務め、1956年には引退しカナダに帰国していた。

創立80周年記念号の「東光」にミス・ハミルトンは「〔戦後すぐの時期に〕学校は〔長野〕院長の献身と賢明な指導力とによって、恐ろしい戦争にも事なきをえ、戦後一途に発展の道をたどっていたので、感謝のほかありませんでした」と語っている。長野院長が新任の時に校長だったミス・ハミルトンは、時には厳しく長野先生を指導したという。その長野先生こそが、自分が戦時中に東洋英和に思いを残しながら日本を去らなければならない間、学校を

守り通し、戦後には院長として学院を再建していった過程を、ミス・ハミルトンは熟知していた。その道程がいかに険しいものであったのかを一番理解していたのはミス・ハミルトンだったのだろう。学院の80周年に寄せられた言葉にはミス・ハミルトンと長野院長との深い絆が刻まれている。



元校長のミス・ハミルトンも80周年創立記念行事に参加するために来日した(右上)。式辞を述べる長野院長(右下)。

おわりに

オリンピックを開催できるまでに日本が経済成長を果たしたことで、東洋英和の発展は全く無関係ではない。創立80周年記念式に招待されたカナダ・ミッション代表のウィルナー・トマス女史の評伝 *A Tree Planted By The Water* には、オリンピックイヤーにおける日本の発展は実に驚異的であったと語られ、急速に変化する日本の状況についての報告のなかに東洋英和の80周年も紹介されている。カナダの教会にとって日本が復興し、先進国の仲間になっていったことは、東洋英和をはじめとする支援先の学校との関係に一つの区切りが訪れる指標となった。1964年のオリンピックイヤーは東洋英和の歴史にとって重要な転機であった。

無事に80周年の行事を終えることが出来た長野院長は、翌年1965年には80年にわたるカナダの教会の人びと、宣教師の先生がたによる支援への返礼を忘れず、カナダを訪れた。このことについては、また後日、「史料室だより」で紹介したい。

松本 郁子 (史料室)



〈資料紹介〉 36 学院創立80周年 関連資料

今回の資料紹介では、本号の特集1で言及されている1964年の学院創立80周年の関連資料を当時の在校生の証言を交えながら紹介します。10月の東京オリンピックに続く11月に「学校全体でお祝いしている感じだった」という創立80周年の記念週間。当日のためのプログラムだけでなく、後日24ページにわたるアルバムが編集・刊行されて生徒にも配布されており、お祝いに沸き立つ学院の様子を今に伝えています。

各部催物一覧表

11月11日(水)				11月12日(木)			
短大かえで寮	中 高 部	小 学 部	幼稚園	短大かえで寮	中 高 部	小 学 部	幼稚園
講義(校庭)	講義(校庭)	講義(校庭)	幼稚園(校庭)	講義(校庭)	講義(校庭)	講義(校庭)	幼稚園(校庭)
演奏(校庭)	演奏(校庭)	演奏(校庭)	幼稚園(校庭)	演奏(校庭)	演奏(校庭)	演奏(校庭)	幼稚園(校庭)
演 劇	演 劇	演 劇	演 劇	演 劇	演 劇	演 劇	演 劇
フォーカ・ダンス(校庭)	フォーカ・ダンス(校庭)	フォーカ・ダンス(校庭)	フォーカ・ダンス(校庭)	フォーカ・ダンス(校庭)	フォーカ・ダンス(校庭)	フォーカ・ダンス(校庭)	フォーカ・ダンス(校庭)
コワイア・ダンス・ショー	コワイア・ダンス・ショー	コワイア・ダンス・ショー	コワイア・ダンス・ショー	コワイア・ダンス・ショー	コワイア・ダンス・ショー	コワイア・ダンス・ショー	コワイア・ダンス・ショー
放送劇	放送劇	放送劇	放送劇	放送劇	放送劇	放送劇	放送劇
人形劇	人形劇	人形劇	人形劇	人形劇	人形劇	人形劇	人形劇
英 劇	英 劇	英 劇	英 劇	英 劇	英 劇	英 劇	英 劇

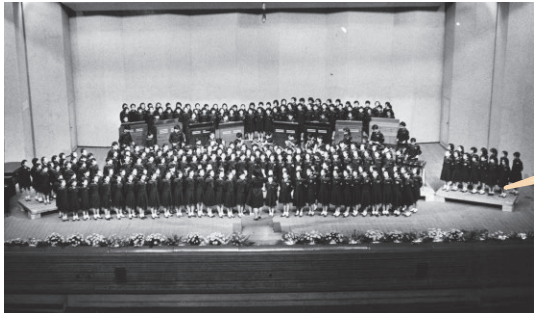
創立八十周年記念式
 厚生年金会館ホール/11月6日(金) 10時
 讃美歌/75番
 聖書・祈禱/鳥居坂教会教師 浜崎太郎
 式 辞/学 院 長 長野 徹
 感謝状並に表彰状贈呈
 讃美歌/225番
 合唱/ロッシェーニ 希望 高等部
 祝 辞/カサタ合同教会
 基督教学校教育同盟
 元校長・後援会・同窓会等
 挨拶 事 長 古坂正城
 栄/549番
 祝 詞/日本基督教団 大村 勇

記念音楽会
 厚生年金会館ホール/11月7日(土)
 1時-3時30分
 合 唱 (幼稚園・小学部児童)
 女声三部合唱 (中高部生徒・短大学生)
 全 員 合 唱 「東洋英和の歌」
 器 楽 合 奏 (小学部児童)
 ピアノ二重奏 (中高部ピアノ科生徒)

まるまる1週間も授業がなくてお祭り気分だった。

- 周年記念行事のスケジュールは
- 11月6日(金) 記念式
 - 11月7日(土) 記念音楽会
 - 11月9日(月) 公開行事準備
 - 11月10日(火) 学内見学日
 - 11月11日(水) 公開行事
 - ~12日(木) 一般公開日
 - 11月13日(金) 片付け
- となっており、まさに1週間行事が続きました。公開行事は幼稚園から短期大学各部で行われました。

各部催物一覧表



記念音楽会 (1964年11月7日 東京厚生年金会館にて)

いつもの創立記念日は小学部校庭に勢ぞろいするのに、この年は大きなホールでの式典と音楽会があり、英和ってすごいな、という印象を受けた。

11月6日の記念式、7日の記念音楽会は新宿の東京厚生年金会館が会場となり、全在校生、教職員のほか来賓、旧教職員、東光会・後援会・母の会役員などが集いました。

「東洋英和の歌」は、合同の音楽会で、全員で歌うことになっていたので、練習をした。明るくて、弾むような気分がした。富岡正男先生のキャンパソングの延長のような感じもして、校歌が荘重な雰囲気なので、子どもっぽくも感じた。

東洋英和の歌

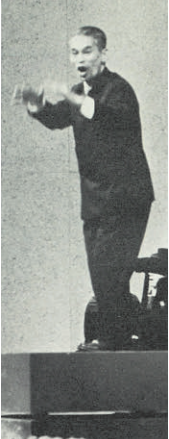
詞・鶴沼 幸
 曲・富岡正男

あたらしく かえで芽吹く
 とおい空 富士も見えて
 きよらかな あかるい庭
 幼い日 ここに育ち
 ひとつぶの そのたね 今
 仰ぎ見る 光のなか
 のびてゆく このしあわせ

東洋英和 英和

風光り かえでそよぐ
 ゆく雲よ 海も見えて
 さわやかな ふかい木陰
 若い日を ここに思う
 ともし灯の まことと愛
 とこしえに かおる命
 うけてゆく このさいわい

東洋英和 英和



記念音楽会で指揮をする 富岡正男先生

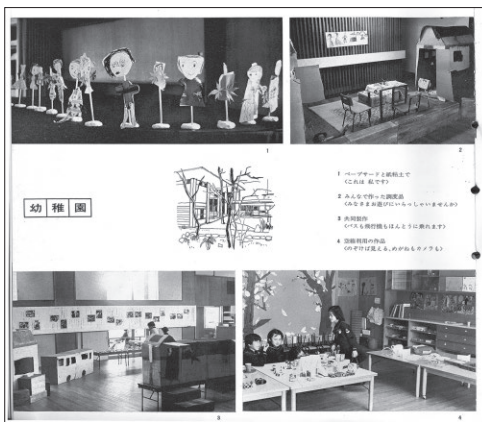
「東洋英和の歌」は、元々の校歌があまりにも難しいので幼稚園児や小学生にも歌いやすいように作られ、80周年記念音楽会で全員が合唱し、お披露目となりました。



記念式 (1964年11月6日 東京厚生年金会館にて)

記念式で大勢の先生が表彰されたのを覚えている。

記念式では永年勤続の教職員への表彰が行われました。46年間勤務した吉本てう先生はじめ、鵜沼幸先生、丸山民子先生、南波シゲ先生、菱谷マツ氏が翌年3月に退職となりました。戦前、戦中、戦後と学院を守り続けたベテランの先生がたの退任は一つの時代の区切りを感じさせるものだったといえます。



幼稚園では「幼稚園児の生活と作品」をテーマに展示を行いました。

各部で行われた公開行事

自分中は1で、ダークダックスの会が小学部開催だったのがうらやましかった。



小学部では音楽会、美術展のほかに、メンバーに保護者がいらした男性重唱団ダークダックスを聴く会を開催しました。

中高部での展示などを記念祭として一般公開したのは、やはり特別の年だったのだと思う。



中高部では公開行事としてステージ系クラブの公演、聖歌合唱、弁論大会、保護者だった作家の戸川幸夫氏講演、展示・展覧会が行われました。この公開行事の実施が、後年の中高部「楓祭」へとつながっていきます。



短期大学では「かえで祭」を実施。英語劇などの講堂での催物、食堂・バザー、展示、後夜祭が行われました。

1964年の東京オリンピック・パラリンピックでは、東洋英和の卒業生、先生が運営に携わっていました。特集2では、各方面で活躍した学院関係者を紹介します。

原田知津子さん

「おもてなし」の原点

チーフコンパニオンとして活躍



原田知津子『希望の祭典・オリンピック』幻冬舎、2012年

学院創設者ミス・カートメルとの出会い

オリンピックという国際交流の最前線で原田さんが活躍されたこと、東洋英和の教育とは深いつながりがありました。



原田知津子「カートメル先生の思い出」(「史料室だより」No.63掲載)

『希望の祭典・オリンピック 大会の「華」が見た40年』の著者である原田知津子さんは東洋英和の卒業生です(1941年高等女学科卒)。

原田さんは、1964年の東京オリンピック大会で34人のメンバーをまとめるチーフコンパニオンを務め、IOC(国際オリンピック委員会)の委員やその家族、世界各国からのVIPへの対応を担当しました。以後、数々のオリンピックとIOCの活動に参加し、約40年にわたりオリンピックに関わり「おもてなし」を実践しました。

原田さんは父親の仕事の関係で1歳の時にカナダのトロントに移り住み、北米社会で育ちます。そこで原田さんは東洋英和の創設者であるミス・カートメルと出会っています。その縁から、原田さんの母は英語しか話せない娘に日本での教育を授けるため、原田さんが11歳の時に日本に帰国させ、東洋英和女

学校の「別科(スペシャルクラス)」に入学させます。「別科」は当時の校長だったミス・ハミルトンが発案したもので、帰国子女に日本語教育、日本の習慣を身につけさせ、徐々に通常のクラスへ編入させていくための学科でした。

当時別科の担当だった秋山はる(春子)先生の厳しくも楽しく、行き届いた指導のもと、原田さんは日本語の取得とともに、西洋式・日本式のきちんとした生活習慣やマナーを身につけたと言います(原田知津子「私の恩人：秋山春子先生」(「史料室だより」No.78参照)。バイリンガルとしての語学力だけではなく、東洋英和での生活全般のしつけを含めた学びが、オリンピックのチーフコンパニオンへの抜擢につながっていきました。

東洋英和での学びをさらにキャリアに活かす

原田さんは親元を離れ東洋英和の寄宿舎で過ごした10代の日々を思い出し、衣類の整理、洗濯、ベッドメイキング、掃除、食堂の配膳、整理整頓までをすべて自分でしなければならない、自立を促す環境であったと語っています。東洋英和で学んだ規則正しい合理的な生活術は、原田さんの別のキャリアにも活かされました。原田さんは1981年より自宅を開放し、世界のおもてなしにも通じるハウスキーピングレッスンを若い女性たちに施し、快適・快速な家事術を多数の著作で紹介しました。現在読んでも色あせないその家事術は、東洋英和の教育がもたらしたものでした。



別科時代 知津子さん(前列左から2人目) 秋山はる(春子)先生(右)

佐々木孝男先生



佐々木孝男氏(中高部教諭・体育)
東京オリンピック競技会補助役員として
期間中出張。

「学内ニュース」第2号
(1964年9月30日)



『東洋英和バスケットボール部 70年史』より
(写真左の後ろ姿が佐々木先生)

「ズーさん」は大会期間中は出張

中高部の体育教諭だった佐々木孝男先生は、「ズーさん」の愛称で呼ばれ、当時のバスケットボール部を中学の私立大会、都選手権、高校の国体予選や関東大会に出場させるなど、熱心な指導で知られていました。

佐々木先生は、東京オリンピック大会に先立つローマ大会について「ローマ大会雑感」と題して、「東洋英和新聞」(1960年9月27日)に寄稿しています。そこで先生は、日本人とスポーツの在り方について語り、4年後の東京大会への期待を書き綴っていました。

そうして迎えた1964年の東京オリンピック大会では、佐々木先生はオリンピック大会の補助役員と

してのお役目があったため大会期間中は出張だったと報じられています「学内ニュース」(第2号1964年9月30日)。

佐々木孝男先生と車椅子バスケットボール

実は、佐々木孝男先生は、東京オリンピック大会のあとに開催されたパラリンピック大会で、車椅子バスケットボールの審判を務めました(写真左の後ろ姿が佐々木先生です)。佐々木先生は結婚に際し、「僕の将来は車椅子バスケットの指導者だ」と奥様に宣言されたそうで、長年関東労災病院チームの指導に当たっていらっしゃったそうです。佐々木先生は、アジア初のパラリンピックの開催となった大会にこうしたかたちで貢献し、尽力されました。

✿ 中高部地歴部もオリンピックについて展示

2019年度の中高部楓祭にて、中高部地歴部は「1964→2020東京オリンピック」と題して、展示を行いました。史料室にも調査に訪れ、当時の学院刊行物や写真を検索しました。

展示では、特集2で紹介した原田知津子さんのことや、「世界各国に衛星を使って生中継でテレビ放送されるようになったのは東京オリンピックが最初である」など、オリンピック豆知識も紹介されました。さらには国立競技場での日本選手団入場のジオラマも作製されていました。そのコンセプトは、当時カラーテレビが普及しつつあった状況をふまえ、「家で東京オリンピックの開会式を見ている様子」を再現したとのことでした。見応えのある、力の入った展示でした。



〈東洋英和の先生がた〉4 芝原 翠 先生

短期大学図書館と史料室のパイオニア



最新の専門知識を身に付けて

「眼鏡の奥に ある時は鋭く ある時はモナ・リザ顔
負けのやさしさでもって光る目には、長い辛苦の人生
の中で昇華された知性と教養の粋を読み取ることが
できる」

これは新富英雄本学名誉教授が「短大だより」
No.28 (1981年11月1日) の「メイプル・プロ
フィール」で語る、芝原翠先生の一面である。その
当時短期大学メンバーの最古参であった芝原先生の
足跡を、先生をよく知る教職員の声を通してたどっ
ていきたい。

芝原翠先生は、自由ヶ丘学園から東洋英和女学校
小学科5年に転入し、東洋「永和」高等女学科卒業
後は日本女子大学校に進学した。その後、当時の長
野彌院長の勧めもあり、草創期の慶應義塾大学文学
部図書館学科に編入学、同学科2期生として卒業し
東洋英和女学院短期大学で司書となり、図書館界へ
の第一歩を踏み出された。

芝原先生の就職された1954年4月に短大英文科
が開設され2棟の木造校舎が竣工、1959年には新
校舎竣工、1968年に増築される等、校舎の充実と
ともに短大図書館も発展を続けた。

学内外の短大図書館の重鎮として

慶應義塾大学で米国人の教授から直接教えを受け
た芝原先生は、英米では主流であった「辞書体目録」
を短大図書館にいち早く取り入れた。これはabc順
に並んだキーワードから著者・書名・件名を一度に
調べることができる複合的な目録である。目録作り
も全てが手作業で苦労も多かった。始めはガリ版刷
りのカードに英文タイプあるいは手書きでキーワー
ドを記入していたが、その後和文タイプを経てパソ
コンを早い時期に導入、その頃のフロッピーは8イ

ンチで1枚の保存容量が少なく、バックアップを
とったフロッピーは何枚にもおよんだ。「上司で
あった芝原先生は図書館のために30年以上、努力
を惜しまず『敬神』の気持ちを強く持って働かれた」
と元図書館職員は語る。

芝原先生の一本筋の通った姿勢は、共に働いた職
員たちの心に深く刻み込まれている。「芝原先生は
いつもご自身の中に毅然とした善悪の判断基準を
持っていらして、それが揺らぐことはありませんで
した。何より私が感銘を受けたのは、自分がおかし
いと思ったことはすぐ声を上げるという姿勢です。
誰しも後で文句を言うことはありますが、その場では
はっきり意見を言うことはなかなかできません。芝
原先生は素早い判断力とともに勇気をお持ちだった
と思います」。そのような芝原先生を慕って、伊藤
ゆきお・くすはらともこ
之雄・楠原偕子・佐々木みよ子・高島誠・丹羽淑子・
黒田成子の各先生等、図書館事務室へ立ち寄る短大
教員も多かった。学生からは進路等について真剣な
相談を受けることもあった。1970年代の活気溢れ
る短大では教職員も学生も個性的で、芝原先生はど
ちらにとっても頼りになる存在なのであった。

職業人として凛とした姿勢を貫く一方で、ユーモ
アのあるお茶目な一面を懐かしむ声も聞こえてくる。
定期的に納品等に訪れる書店員たちとしばし軽妙な
やり取りをしている光景は愉快で、図書館事務室は
笑いがあふれ、さながらオアシスのような雰囲気であ
った。進取の気性に富む先生は、健康グッズや紅茶
きのこに凝ってみたり、いたずらをする時も発想が
ユニークで「人の先を行っていた」そうだ。長年
短大ワンダーフォーゲル部の顧問を務められたため、
山歩き等の話題も豊富だった。

芝原先生は英文科における図書館の利用者教育の
重要性に着目し、「図書館教育」(科目名は「図書館

学」[「図書館オリエンテーション」[「図書館学入門」から変更)の教鞭を取られた。短大の「講義要覧」によると、先生の教授期間は1962~1993年で、そのうちの1964~1991年度は必修となっている。これは短期大学としては先駆的なことであった。授業は参考書誌の使い方や書誌の作成も含む本格的な内容であった。

芝原先生は私立短期大学図書館の質的向上についても尽力された。東洋英和の短大図書館の基礎を着々と固めた先生は、学内に留まらず「東京都私立短期大学協会(東短協)」「日本私立短期大学協会(日短協)」の図書館部門の委員を務め、「私立短期大学図書館協議会(私短図協)」の設立に関わる等、全国の私立短期大学図書館の顔役としても活躍された。

また、学内外で後進の指導にも力を注ぎ、1980年には椎葉^{しばもとこ}倅子氏(元東京女子大学短期大学部図書館、慶應義塾大学文学部図書館学科1期生)とともに「短期大学図書館員勉強会」を開始した。月1回土曜日の午後、各館から10名程が集まり、東京大学大学院教育学研究科(図書館学専攻)のチューターが選んだ英語の論文を講読するハードな場であったが、当時図書館の先進国であったアメリカの研究論文を読むことで、最先端の利用者教育など幅広い知識を習得するとともに、横の繋がりができ他館の職員との情報交換も盛んになった。「他の短大図書館の状況を見聞きする時、英和の図書館が館員数、設備及び活動内容などの点で全国的にも水準が高いということを知り、誇りに思ったものです。これは英和の図書館が、先生の高い見識と意志とを持って築かれたことの証だだと思います」と元参加者は振り返って語る。

勉強会での研鑽と併せて、短大図書館メンバーが学内の業務とは別に編集にあたったのが、『言語学・英語学関係基本文献目録』(私立短期大学図書館協議会、1987年3月)である。この目録が完成したのも、図書館員の實力向上に心を砕かれた芝原先生の呼び掛けおよび新富先生のご指導があつてのことであった。

元図書館メンバーの意見が以下の言葉に集約されている—「芝原先生の存在なくして、現在の東洋英和の大学図書館はないといえるだろう」。

「東洋英和女学院史料室」の開拓者として

図書館を定年退職の後、芝原先生は史料室初の専任職員に就任された。史料室委員会発足の頃から長年にわたり活動を共にした朽木久子先生(元中高出



秋山はる先生へのインタビューで館山へ(「史料室だより」No.14参照)。左から朽木久子、芝原翠、中野登美子、秋山はる(敬称略)

教員)は、「青山学院やフェリス女学院の資料室を見学したり、秋山はる先生のところや、明治時代の卒業生に話を伺ったり

お話を伺ったりする時に一緒にしました。短大図書館の書庫から始まった史料室は先生が基礎を作られたものです。黒川信也先生(元高等部長)と3人で『目で見える東洋英和女学院の110年』の編集もしました」と語る。

「史料室だより」No.1とNo.57の芝原先生の記述から、史料室の基礎を築かれた過程を知ることができる。今も史料室に残る分類カードと手書きの目録を目にする度、芝原先生の几帳面な仕事ぶりに敬服する。そして先生の「夢」であったデジタルデータによる「機械検索」の構築は、史料・図書・写真目録それぞれの仕組みができ、いずれも現在進行形である。

【取材協力】元東洋英和女学院短期大学・大学図書館職員 梶田マリ・木島伸子・久野歌子・鷺谷由美・宮田伸子(敬称略、五十音順)

芝原 翠(しばはら・みどり)先生 —略 歴—

1925年2月10日	誕生
1942年3月	東洋永和女学校高等女学科卒業
1945年9月	日本女子大学家政学部卒業
1952年4月	慶應義塾大学文学部図書館学科編入学
1954年3月	同 卒業
1954年4月1日	東洋英和女学院短期大学司書となる (主任司書、副図書館長を歴任)
1980年4月~1985年3月	東洋英和女学院評議員
1985年3月31日	東洋英和女学院短期大学図書館を退職
1985年4月1日~1992年9月30日	東洋英和女学院短期大学非常勤講師
1985年4月1日~1995年3月31日	東洋英和女学院史料室嘱託職員
2017年8月1日	永眠(享年92歳)

学院資料展示コーナーご案内

「1964年 東京オリンピックの時代と東洋英和女学院」

この企画展示では本号の「史料室だより」No.94の特集に関連し、1964年の東京オリンピックの時代に焦点を当て、オリンピック・パラリンピックに関わった学院関係者を紹介し、当時の学院資料を展示します。

〈学院資料展示コーナー企画展会期〉

2020年2月4日（火）～2020年9月12日（土）



村岡花子文庫展示コーナーご案内

「村岡花子からたどる東洋英和の英語教育」

英語の実力によって自らの運命を切り開いていった村岡花子が東洋英和女学校で受けた英語教育はどのようなものだったのでしょうか。この企画展示では村岡花子の洋書コレクション、東洋英和の英語教育に関する資料を紹介します。

〈村岡花子文庫展示コーナー企画展会期〉

2021年2月13日（土）まで



【学院資料・村岡花子文庫展示コーナー】 感染症の拡大等により公開日時などが変更になることもございます。

入場料：無料 どなたでもご自由にご覧いただけます。／展示場所：東洋英和女学院 六本木校地本部・大学院棟 1階／公開時間：日曜日・祝日・長期休暇以外の9：00～20：00（土曜日は9：00～19：00）

※館内の洗面室はご使用いただけません。／団体での見学の場合は、予めお知らせください。

【お問い合わせ】 東洋英和女学院史料室 E-mail：archive@toyoeiwa.ac.jp TEL：03-3583-3166（直通）

—港区と東洋英和女学院の連携事業—

2020年度 東洋英和女学院大学 村岡花子記念講座

**新型コロナウイルスの感染防止のため、
今年度は開催を中止いたします。**

●申込方法 氏名・住所・電話番号・希望の回（複数回可）をご記入の上、メール・FAX・往復ハガキにて生涯学習センター横浜キャンパス事務室宛にお申し込みください。

●申込期限 原則として各回開催日2週間前（先着順） ●無料

●申込開始 2020年6月11日（木）予定 ※新型コロナウイルス感染拡大のため変更が生じる場合がございます。最新情報は大学ホームページにてお知らせいたします。

【お申し込み・お問い合わせ】

東洋英和女学院大学生涯学習センター横浜キャンパス事務室（〒226-0015 神奈川県横浜市緑区三保町32）
E-mail：shougaictr@toyoeiwa.ac.jp TEL：045-922-9707 FAX：045-922-9701

※感染症拡大、天候不良や交通機関の乱れなど不測の事態による開始時刻の変更や開催中止については、大学ホームページにてお知らせいたします。

主催：東洋英和女学院大学 共催：港区麻布地区総合支所



ヴォーリズ校舎

地下の巨大ベルトコンベアー?!の謎に迫る

昨年2019年12月14日の村岡花子記念講座「建築家W.M.ヴォーリズと東洋英和女学院」の講座の後、講師の芹野与幸先生より「卒業生の方が、びっくりするものを東洋英和の旧ヴォーリズ校舎でご覧になったそうですから、おたずねしてみるといいですよ」と、ご助言をいただきました。

早速に、その卒業生の岡田苑子さん（1966年高等部卒）を史料室にお招きしたところ、「もう時効ですから、申し上げるのですが…」と、うかがったお話は今まで史料室では聞いたことがない驚愕の内容でした。

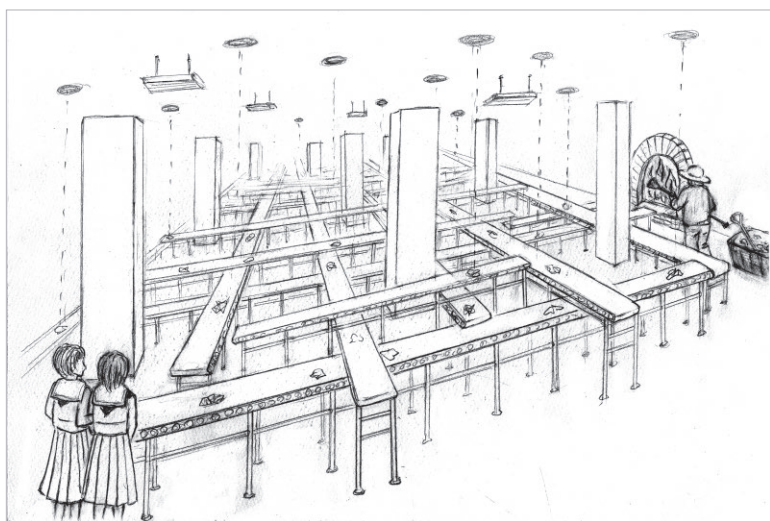
当時、中学部1年生の岡田さん（旧姓 神山）は仲よしだった大坪浩子さん（旧姓 木村）と二人で、校舎1階の生徒入口の脇にある細い外階段を見つけ、ちょっとした冒険心からそこを下り、さらに細くなった階段口にぶら下がる「進入禁止」の鉄の鎖を潜り抜け、地下1階に下り、階段の先の鉄の扉を開け中に入りました。

するとそこには、打ちっぱなしの壁に薄暗い照明のついた地下大空間が広がり、太い柱の合間をぬうように、上下になったベルトコンベアーがぐるぐる回っていたというのです。上からは「ダスターシュート」（後述）からのごみがポトポト落ちてきて、そのごみがベルトコンベアーに乗っかり、その行きつく先を見たところ、一人の太ったおじさんが立っていたそうです。おじさんは石炭とともに、ベルトコンベアーで集められたごみを一緒にゴーゴーとボイラーで燃やしていました…。意外過ぎる光景に、二人で呆然と立ちつくしていると、突如振

り向いたおじさんに気づかれ、「カラー!!」と、ものすごい勢いで怒鳴られたため、慌てて地上に逃げ帰ったそうです。すさまじい怒号だったので、「これは二人の秘密にしておこう…」と、岡田さんたちは、卒業後もずっとこの部屋について沈黙を守っていたそうです。

あの部屋は一体何だったのか？ということでもヴォーリズ建築事務所による設計図「東洋英和女学校校舎平面図」を見てみると、1階図面の端に「ボイラー室」図面が別記されており、これが生徒入口付近の地下に該当することがわかりました。ボイラー室の横には「石炭庫」があり、「DUST CHUTE」「ELECTRIC SWITCHES」の文字も確認できました。岡田さんたちが探検したのはこの部屋だったのです。

岡田さんいわく、ヴォーリズ校舎には各所に壁に格納されたごみ投入口である「ダスターシュート」があり、そこに生徒たちはごみを捨てていたのですが、校内にはごみ箱がなかったそうです。そして、今思えばそのごみが収集され、ボイラー室に落ち、そのごみは燃料として活用されていたようです。プラごみなどが増えたせいも、「ダスターシュート」はそのうち使われなくなっていきましたが、ごみも無駄にしないヴォーリズ校舎の設計に改めて感心した次第でした。「ダスターシュート」のしくみなど、どのようにごみが校内を移動したのかなど、まだ謎は残りますが、もしご存知の方がいらっしゃれば是非、史料室にご一報ください。



岡田苑子さんによる再現スケッチ



利用統計 (2019年10月～2020年3月)

		10月	11月	12月	1月	2月	3月
展示見学者数		134	170	153	50	147	35
展示見学者区分	学内関係者	39	84	38	32	98	8
	一般	95	86	115	18	49	27
		10月	11月	12月	1月	2月	3月
資料閲覧者数 (累計)		3	10	3	0	4	3
閲覧者区分	本学学生・生徒						
	現教職員	2	2	1		2	1
	旧教職員		1				
	同窓生・学院関係者	1	5	2		1	
	同窓生 (研究者)						
	他校研究者・学生		2			1	
	一般						2
利用の目的	年史編集						
	著述・論文作成		1	1		2	1
	伝記資料調査						2
	記録類の調査・研究		3	1		1	
	学院広報関係		3			1	
	その他	3	3	1			
資料の種類 (重複あり)	東洋英和関係	3	9	2		3	3
	カナダの教会関係	1	2				
	村岡花子関係			1		1	
	周辺地域史						
	その他						
		10月	11月	12月	1月	2月	3月
月別レファレンス件数		7	5	7	4	8	5
質問者の区分	本学学生・生徒						
	現教職員	1	1	3	3	6	
	旧教職員					1	
	同窓生・学院関係者	4	1	1			
	同窓生 (研究者)					1	1
	外部研究者・学生	2	2	1			
	外部研究機関						
	一般		1	2	1		4
質問内容 (重複あり)	資料所蔵調査	3	3	3	2	2	3
	写真所蔵調査	1					2
	事項調査	6	3	6	4	7	5
	その他						

史料室の活動より (2019年10月～2020年3月)

(☆は複数回)

2019年10月

- ・ 1日 追悼記念日礼拝のため、旧教職員・学院関係者、多数来室
- ・ ☆コロンビア大学キャロル・グラック教授招聘準備
- ・ 村岡恵理氏と展示企画、『アンのゆりかご』翻訳事業、周年記念講演パネルディスカッションについて打合せ
- ・ ☆校正一「史料室だより」No.93
- ・ ☆学芸員課程における博物館実習のため本学学生を史料室で受け入れ(資料整理・展示準備・展示解説等を実習)
- ・ ☆村岡恵理著『アンゆりかご』翻訳関連事業
- ・ 大学図書館除籍本リストチェック、移管を依頼
- ・ 照会一海外大学院生より、鶴来文子先生の読み方について→「ツルキ フミコ」か。先生は、国語科教員、校友会第2代文芸部長図書館長、校友会誌支援、校歌制定委員。1945年5月空襲により亡くなる
- ・ 照会一学院関係者より、「軽井沢ヴィネット」に別荘のイラストを描くにあたって、東洋英和の宣教師などについて
- ・ 資料整理 (小学部資料ファイリング、百周年資料の箱整理)
- ・ 校正一「東洋英和女学院 説教集」第2号
- ・ NHK ETV特集「シリーズ日系人強制収容と現代 暗闇の中の希望」(ミス・ハミルトンの戦中の奉仕について紹介) 放映 (中高部、史料室で取材協力)
- ・ ☆来室/調査一高等部長。ミス・ブラックモア、東洋英

和学校、江原素六について

- ・ ☆照会一初期の卒業生・教員の渡邊里雨、娘の渡邊里枝・千鶴代について、画像や同窓会報での記述などを調査
- ・ 校正一同窓会クリスマス礼拝チラシ
- ・ 出張一大学史資料協議会全国大会総会・講演会参加 (史料室:松本・三笠)、立教学院にて。後日、日本女子大学、学習院大学の見学会にも参加
- ・ 来客一福田会 大江良信氏。カナダの日系人強制収容所の話からポーランド孤児救済の歴史についてご教示いただく
- ・ 照会一中学部長より、宣教活動の始まりなどについて
- ・ 校正一「楓園」桜プロジェクト記事、画像も送付
- ・ 執筆一「楓園」89号「史料室レター」
- ・ 照会一建築家より、旧ヴォーリズ中高部校舎、新校舎、ヴォーリズなどについて

2019年11月

- ・ 来室一桃山学院 学院史料室西口忠先生。展示コーナー、史料室、書庫のご案内
- ・ 来室/調査一中高部教諭。進学取材のため制服について
- ・ 5日 コロンビア大学歴史学部教授 キャロル・グラック氏による高等部3年生日本史授業を参観
- ・ 6日 学院創立135周年 大学開学30周年記念講演・パネルディスカッション (キャロル・グラック氏、コロンビア

- 大学政治学部准教授 彦谷貴子氏、作家 村岡恵理氏登壇)
- 来室／調査—旧教職員。学院、WMSについて
- 来室—外崎弘子氏、昔の写真を見せていただき、出流山での集団疎開の思い出を語っていただく
- ☆村岡花子記念講座関連業務 中川李枝子氏講演について、同窓会役員、村岡恵理氏、生涯学習センター、学長室、史料室で打合せ
- 照会—小学部母の会より、「ぎんなんだより」のため、軽井沢追分寮の写真・地図について
- ☆校正—谷川祐子氏の小学部キリスト教勉強会での講話を「めぐみ」に掲載するための原稿
- 照会—他校研究者より、村岡花子と雑誌『ケルビム』について→史料室、村岡家にも所蔵なし
- 照会—NHKより、戦前～戦後のミス・ハミルトンについて→「東洋英和NEWS」「WMS年報」などを紹介
- 16日 村岡花子記念講座 講師：溝上智恵子教授（筑波大学）「カナダの日系人強制収容所における東洋英和宣教師の教育支援活動について」
- ☆校正—「楓園」89号
- 来室／調査—中高部母の会ボランティア部長。こどもさんびか24番について
- 照会—高等部長より、中高部にあるシュバイツァーの麻のスクリーンはどこからいただいたものか→シュバイツァーとともに働いていた高橋武子（1935年高等部卒）の48歳の誕生日にシュバイツァー博士から贈られたもの
- ☆周年記念行事記録集作成業務
- 執筆—「楓園」89号 学院NEWS
- 来室／調査—他校大学院生、東洋英和関連
- 来室／調査—静岡文化芸術大学 水谷悟准教授、学生の卒論指導のため、カナダ関係の文献の所蔵を確認
- ぎんなん献金のため幼稚園児来訪、展示コーナーを見学
- 来室／資料提供—外崎弘子氏。父上の外崎長三郎元小学部長の記念誌『88年のあゆみ』をお借りする
- 出張—福田会主催講演会（史料室：松本・三笠）
- WMS研究会に参加（史料室：松本・三笠）。講師：朽木久子氏（元中高部教諭）。資料も貸出（『目で見る110年』『カナダ婦人宣教師物語』）
- 来室／調査—他校大学生。卒論執筆のためヴォーリズ資料
- 視聴覚資料整理
- 執筆—キ同盟新聞「キリスト教学校教育」キリスト教教育者のシリーズに、ミス・ハミルトンの教育活動について
- ☆来室／調査—学院役員。年史、母の会について
- 来室／調査—本学教員。学内のキリスト教理解について

2019年12月

- 大学図書館からの移管図書、目録の整備
- 照会—大学管財課より校色の指定番号について→ガーネット色はDIC2254
- 照会—緑幼稚園より、ミス・ライアンの強制収容所での活動について→『カナダ日系人合同教会史』を紹介
- 照会—NHKより、1965年カナダ訪問をめぐる長野院長、ミス・ハミルトン関連事項について
- 7日 村岡花子記念講座 講師：中川李枝子氏「本・子ども・絵本」（同窓会クリスマス礼拝と共催）
- 照会—学院関係者より、後援会の歴史について→「楓園」73号ほか、年史類を紹介
- 14日 村岡花子記念講座 講師：芹野与幸氏「建築家 W.M.ヴォーリズと東洋英和女学院」
- 編集協力—「楓園」90号
- 史料室画像データベースの今後の整理について検討

- 史料室委員会アジェンダ作成等準備
- ☆「史料室だより」No.94 執筆準備

2020年1月

- 校正—小学部母の会「ぎんなんだより」
- 執筆—「学院総合案内」（2020年度版）の変更箇所 大江スミ→長野彌院長へ
- 校正—再開発準備組合事務局より組合員へ配布している会報誌1月号 ヴォーリズ校舎について
- 9日 第3回史料室委員会
- 中高部地歴部ボランティア、資料整理・ラベル貼りなど15名ほど参加
- ☆村岡花子記念講座 次年度以降について村岡家をまじえ関係部署で協議
- 校正—「史料室案内」増刷のため
- 小学部資料整理、野尻のしおり整理
- WMS研究会に参加（史料室：松本・三笠）。講師：舟木てるみ准教授（卒業生。高千穂大学）
- ☆校正—2021年度「中高部学校案内」
- 照会—1970年再建の野尻キャンプサイトのホールに掛かっていた井上健之助先生の七言絶句の額の行方と、先生の漢詩作成の意図→『野尻教育施設の由来』見返しに、複写画像と長野彌先生による注記あり
- ☆校正—2021年度「大学案内」年表ほか
- ☆学院資料展示コーナー企画展準備
- 中高部資料整理
- ☆校正—「ザ・AZABU」村岡花子記念講座 芹野氏の講座報告
- 資料整理（クラス礼拝原稿、葬儀関係ファイル等）、写真整理
- ☆校正—2020年度「学院総合案内」（和文・英文）
- 照会—ピクスより、村岡花子宛の林芙美子の書「花のいのちはみじかくて…」の文言について、乃木坂46関連で全文確認要請あり
- 法人各々が集合し、地下二階倉庫・書庫使用の現状と課題、文書管理について確認
- 幼稚園資料整理
- 各部写真の年次ごとの史料室委員会委員の提出具合を確認
- ☆調査—芝原翠先生について、各関係者におたずね

2020年2月

- 学院資料展示コーナー企画展「1964年 東京オリンピックの時代と東洋英和女学院」設営
- 来室／調査—ドキュメントセンター、総務課。学院デザインソース用の各意匠を検討
- 調査—佐々木孝男先生（元中高部体育科）について、三谷操先生、中村健二先生、バスケットボールOGにおたずね
- 来室／調査—編集者（卒業生）。国民服やもんぺ姿の女学生の画像を検索
- 照会—オペラ歌手ヒジ小池（卒業生）について→個別資料ファイルあり。公演パンフレットなどを含む
- 照会—木下英太郎氏の信託契約書をもとに、木下英太郎氏の奨学金について→戦前に合計3万円の寄附があり、生徒や教員の奨学金の原資としていた
- 照会—他校研究者より、『日本大学女子学生会会誌』に「村岡はな」の名前が載っているが、村岡花子と同一人物か→村岡家にも確認、別人物と思われる
- 来室—岡田苑子氏（1966年高等部卒）、ヴォーリズ校舎地下のボイラー室についてお話をうかがう
- 22日 村岡花子記念講座 講師：小川琢磨氏「日本の近代を全力で駆け抜けた颯爽たる女性 広岡浅子」

- ・執筆「楓園」90号 史料室レター
- ・校正—大学 朝日教育会議振り返り記事
- ・☆新型コロナウイルス関連ファイル作成

2020年3月

- ・村岡恵理氏と2020年度の村岡花子文庫展示コーナー企画展について打合せ
- ・照会—アンシリーズの原書題名について
- ・各校・団体広報誌ファイル、中高部関連資料整理
- ・来室—オランダのミニー・スネルレン氏（1940年高等女学科卒）の娘さん・お孫さんご来校。中高部と史料室スタッフで学内案内、在校時の資料などを紹介
- ・☆村岡花子文庫展示コーナー企画展示準備
- ・☆照会—ミニー・スネルレン氏関連記録まとめ、短歌英訳
- ・「ザ・AZABU」No.51に芹野与幸氏の村岡花子記念講座の紹介記事が掲載される
- ・☆校正・編集協力—「楓園」90号
- ・☆史料目録作成—出版文化社に採録を依頼。2019年度は宣教師関連資料、村岡花子関連資料の目録を作成した

【新規購入資料】

- ・カナダ合同教会アーカイブズより「The New Outlook」[Observer]（1926～1981年）のデジタルデータ

【おもな移管資料】

- ・管財課より、写真ファイル「東洋英和女学院大学新図書館新築工事」、ハードカバー「竣工写真 東洋英和女学院大学校舎増築工事」、写真アルバム「短期大学図書館現カルテットホール 建設途中写真」
- ・人事課より、行事記録写真アルバム多数
- ・中高部聖書科より、1962年頃の修養会の写真、イスラエルの写真などを含めた「スクラップブック」1冊
- ・小学部より、「めぐみ」近年刊行分、多数
- ・死生学研究所より、歴代の死生学講座のチラシ一式
- ・中高部より、学校紹介ビデオ数点
- ・中高部より、6階のオルガンから出てきた中野登美子先生の楽譜類ほか

【おもな受贈資料】

- ・☆初期卒業生・教員の渡邊里雨、娘の里枝・千鶴代ほかご親類の資料多数
- ・秋山はる（春子）先生関連資料
- ・「楓」複数冊、修学旅行しおり
- ・高三修養会しおり、高二修学旅行しおり、おじパン追悼文
- ・かえで幼稚園より、松岡裕子氏が寄贈した絵画の絵葉書
- ・野尻キャンプのしおりとキャンプソング集
- ・『百年史』ほか書籍7冊、学院関連発行物・印刷物、100周年記念品、合唱楽譜2冊

- ・「東洋英和小学部1955」「東洋英和小学部1957」手ぬぐい2本
- ・「TOYO EIWA 2603」卒業アルバム（1943年 東洋永和女学校時代のもの）、日記帳、寄せ書きノート
- ・ミニー・スネルレン氏、旧所蔵の画像データ多数（1920～40年代のもの）

（書籍・雑誌・論文）

- ・松本侑子 新訳『アンへの愛情』、『風柳荘のアン』文春文庫、2019年
- ・『港区小学校道徳副読本 ふるさと～みさと～』。村岡花子の挿話について校正協力したため
- ・村岡花子訳『ピーターという男—妻の描いた夫の肖像—』創元社、1954年初版
- ・鳥飼玖美子氏（卒業生・立教大学名誉教授）より、自著、執筆雑誌、新聞記事など多数
- ・与那原恵『赤星鉄馬 消えた富豪』中央公論新社、2019年（鳥居坂に関する村岡花子の随筆引用あり）
- ・金津福音キリスト教会より、月刊伝道誌「ちから」（2020年3月号）。村岡花子文庫展示コーナーが紹介されている
- ・『死生学年報2020』
- ・記録集『創立135周年 大学開学30周年 記念講演 近代日本における女子教育と東洋英和』
- ・『保育子ども研究2018年度』『保育子ども研究2019年度』

【おもな画像データ・資料提供】

- ・超問クイズ（日テレ）海外向け放送へ、村岡花子訳『赤毛のアン』初版本表紙画像
- ・芹野与幸氏へ、村岡花子記念講座のため英和・ヴォーリズ関係の画像多数
- ・高等部へ、ミス・ブラックモア画像・署名、永坂孤女院画像
- ・梁プランニングへ、「楓園」89号のためミス・ブラックモア、村岡花子の画像ほか12点
- ・ハーツ&マインズ 片山廣子画像1点
- ・大学改革推進課へ、大学パイプオルガン献堂式関連画像4点
- ・梁プランニングへ、「楓園」90号のため過去の体操風景の写真など多数
- ・関西学院大学 神田健次名誉教授へ、紀要掲載のため村岡花子画像1点
- ・死生学研究所へ、渡辺和子教授の画像3点
- ・総務課へ、「学院総合案内」のため画像4点
- ・ドキュメントセンターへ、今後の学院デザインソースになりそうな画像多数
- ・大学へ、周年行事記録集の表紙用画像多数

🌸 既刊の「史料室だより」もお読みになれます

「史料室だより」は全号、学院ホームページで閲覧できます。「東洋英和 史料室だより」で検索、または下記のURLよりアクセスしてください。東洋英和の歴史が満載です。

URL: <https://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/>

🌸 資料ご寄贈のお願い

史料室では、学院の歴史や学校生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。お手許にあつてご不要のものがございましたら、ご寄贈いただくと幸いです。また、卒業生および教員の方々の著作も収集しています。

【お問い合わせ先】 東洋英和女学院史料室 〒106-8507 東京都港区六本木5-14-40

Tel 03-3583-3166（直通） Fax 03-3583-3329 E-mail archive@toyoeiwa.ac.jp